

電子化54号(2011年11月)

発行: 国立国会図書館総務部
(National Diet Library)
ISSN: 1344-8412



[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)

[専門図書館に関する記事一覧](#)

1. 日本資料専門家欧州協会(EAJRS)2011年大会に出席して

岡久 慶

2011年9月7日(水)から10日(土)まで英国(ニューカッスル)で行われた日本資料専門家欧州協会(EAJRS)2011年大会に出席したので、その個人的所感を報告する。

1.EAJRS第2011年大会

EAJRSは、欧州域内の日本研究者、日本担当司書間の情報交換および日本からの情報入手促進普及の目的で1989年に創設され、毎年1回9月頃に年次大会が行われている。2011年の大会は、EAJRSの中心人物である日本研究者ラウラ・モレッティ氏が、日本研究教員として着任したばかりのニューカッスル大学に働きかけて実現したものである。

ニューカッスルはイングランド北部、ロンドンから国内便で1時間の距離にある地方都市であり、大学はイングランド北部最大の言語学部を擁している。会場は現在学棟として使われている、旧図書館だった。参加者は、欧州および日本、カナダ、米国から、日本研究に関わる図書館員、研究者、出版関係者70名であった。

2.開会式

9月10日の開会式では、今大会のホストであるニューカッスル大学言語学部部長代行のメア・クロス教授、東アジア言語研究科のジョアンヌ・スミス・フィンリー博士、学部付司書のルーシー・キーティング氏から歓迎の挨拶があった。続いて、EAJRSのウィリー・ヴァンドゥワラ会長から開会挨拶があり、今回の大会開催にモレッティ氏の多大な尽力と国際交流基金からの支援があったことの言及があった。

3.国立国会図書館からの報告

開会式に続くセッション1で、私から「Great East Japan Earthquake and Libraries: Clearing up and Providing Support(東日本大震災と図書館:被害からの回復と支援策)」と題して、2011年3月11日に発生した東日本大震災が東北地方の図書館及び当館に与えた影響と、その後の図書館復興支援の動きについて報告した。

支援策については、文部科学省による約87億円の補正予算計上の動き、日本図書館協会等が行っているHelp-Toshokanチームの派遣、義援金窓口としての活動、公衆送信権の一時的停止等について説明し、当館については汚損資料の修復活動、震災に関するウェブ情報のアーカイブ化、国会の審議のための報告書作成等を中心に報告した。

4. セッション

報告セッションは9つあり、1報告30分程度30件の報告がなされた。スケジュールはかなりタイトであった。

報告の中でも特に注目したものには以下のものがある。

- 東京大学の長島教授が提唱し、文部科学省が学術研究の大型プロジェクトとして検討している日本語の歴史的典籍のデータベース(電子アーカイブ)の構築の紹介
10年間で210億円の国費を投入する大事業で、今回の計画では、総数の把握と原本の所在が確認できている江戸時代末(1860年代)までの典籍(文書でなく書物)50万点強を対象としている。国内の数多くの大学や学会に協力を要請することになるが、中心となる機関は、国文学研究資料館と東京大学(大学院人文社会系研究科)を予定し、当館長尾館長からも協力の約束を取り付けているとのことであった。ただし事業の執行は「その時の[政治的]状況を文部科学省が判断して」のこととなり、現在はペンディング状態とのことである。
- 立命館大学大学院の赤間教授が推進する、立命館大学アート・リサーチセンターにおけるデジタルアーカイブ事業
研究者自らがデジタル画像撮影を含めたアーカイブ作業に当たりデータベースまで作成するノウハウを構築し、海外にもこれを広めている同センターの活動が紹介された。撮影の専門家ではなく、資料の専門家だからこそ、アーカイブ化に相応しい画像ファイルを作成でき、高速・大量のアーカイブ化が可能であるとの論点だった。
- トロント大学の日本担当司書ファビアーノ・ロチャ氏による、北米日本研究調整協議会による日本の博物館・図書館・文書館(MLA)へのポータルサイトの紹介
北米の図書館コミュニティで広く使われているLibGuidesを利用したシステムである。また報告に併せて、同大学において、北米日本研究資料調整協議会(NCC)主催、国際交流基金支援で行われる日本担当司書研修についての報告もあった。当館で行われる日本研究情報専門家研修に比べると若年司書を対象とし、講習が英語で行われることに特徴がある。
- 当館で2011年2月に開催された日本研究情報専門家研修の報告
フランス国立社会科学高等研究院・日本研究所日本研究所図書館司書のデュルスト康子氏及びプロイセン文化財団ベルリン国立図書館東アジア部日本専門家ウルズラ・フラッヘ氏から報告があった。
- NACSIS-CATの利用の報告
本報告は、1セッション(1時間40分)を使って行われた。まず国立情報学研究所の高橋菜奈子氏から同システムの最新動向についての説明があり、その後英国図書館司書の大塚靖代氏、セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館司書の平野明氏から国立情報学研究所における同システムの研修、及び同システムに基づくカタログ作成についての報告があった。このセッションは、特に大会に参加した日本人の日本担当司書にとって大きな関心の対象であり、外国の図書館において日本に関する情報、資料を提供する任を負う彼らにとっての、オンライン検索ツ-

ルの重要性を再認識させられた。

- 古典籍の電子化・カタログングに関するディスカッション

参加した学識者の円卓会議の中で行われた議論で、今後の資料デジタル化に伴う書誌データの付与について、とにかく作成された画像に最低限の書誌を付けた状態でアップロードし、適宜情報を継ぎ足していくべきとする立場と詳細な情報なしではアップされた画像は役に立たないとする立場とで意見が交わされた。一方で、円卓の当事者ではない日本資料を担当する司書の立場からは、個別の資料に対する専門性を有さず、かつ広範な要望に応える司書の立場から、資料の入手性と使い勝手という面での中庸性を考慮してほしいとの意見も上がった。

- その他

多くの報告が行われたが、学識者の関心を反映してか、浮世絵など古典籍関係に関する研究発表が多い印象を受けた。

以上のようなセッションに参加し、EAJRSにおける現在の関心事は、デジタル化された原資料への直接的アクセス(学識者サイド)と日本資料・情報を提供するためのツール(司書サイド)の2つではないかとの所感を得た。直接的関連性の薄いこういった報告が同じ大会で行われるのは、それだけ日本研究の裾野が狭いことを反映しているのかもしれない。

5.ニューカッスル大学言語学リソースセンター見学

9月7日昼前に言語学リソースセンターを見学した。同センターは旧図書館内にある古式ゆかしい図書室で、日本語を始めとして各種言語の学習教材が揃えられていた。また興味深かったのは学生間の相互言語学習システムで、例えば日本人学生が日本語を教える代わりに英語を教えて欲しいという要望を掲示版に貼れば、それを見た日本語を学習したいイギリス人学生が接触を取り、お互いの言語を教え合うというものである。掲示版には多種多様な言語の申出／要望が貼られており、大学の国際的性格が如実に伺えた。



6.ニューカッスル大学図書館見学

9月7日の午後、ニューカッスル大学図書館を訪問した。開会式でも挨拶をされたルーシー・キーティング司書をはじめとするスタッフに、館内を案内していただいた。図書館は赤レンガ造りのモダンな建物だった。

大学は折しも夏休みであり、内部改装の工事が行われていた。工事内容は書架を撤去し、閲覧スペースを確保するというもので、同大学が国内外から多数の生徒を集めている成功した大学であることが伺われた。また閲覧スペースもPC、OA機器がふんだんに設置され、会話をしてもいいスペース、果ては飲食も許可されるスペースが確保されており、進化し多様化する学生の需要に応える努力が伺えた。

見学の最後に同館が所蔵する古い郷土資料の原本を直接見る機会を得た。資料の中には18世紀の民兵訓練マニュアル等非常に興味深いものがあった。



7.おわりに

今回のEAJRSの大会においては、会議以外にも、報告の合間のコーヒーマイク、見学、レセプション等が、参加者とのよき交流の場となった。

先述したEAJRSにおける関心事—デジタル化された原資料への直接的アクセス(学識者サイド)と日本資料・情報を提供するためのツール(司書サイド)—について、当館は大いに貢献できる立場にある。今後はそういった需要にあった専門スタッフの派遣によって、より大きな寄与をすることを期待したい。

参考資料

- ・日本資料専門家欧州協会(EAJRS)第2011年大会のプログラム

<http://eajrs.net/2011conferenceprogramme>

- ・日本資料専門家欧州協会(EAJRS)

<http://ejrs.net/>

・ニューカッスル大学図書館

<http://www.ncl.ac.uk/>

(国立国会図書館総務部支部図書館・協力課)

[次の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)

電子化54号(2011年11月)

発行:国立国会図書館総務部
(National Diet Library)
ISSN:1344-8412

[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)

[専門図書館に関する記事一覧](#)



2. 【特集:災害と図書館】独立行政法人 防災科学技術研究所 自然災害情報室の紹介

堀田 弥生

1. はじめに

1959年に5,000人以上の犠牲を出した[伊勢湾台風](#)の後、防災科学技術を総合的に研究する社会的機運が高まったことを受け、1963年科学技術庁(現文部科学省)所管の国立試験研究機関として防災科学技術センター(現防災科学技術研究所)が発足しました。

[自然災害情報室](#)は、[独立行政法人防災科学技術研究所法](#)第十五条第四号にある「防災科学技術に関する内外の情報及び資料を収集し、整理し、保管し、及び提供すること」の実務を担う、災害・防災に関する専門図書館です。現在は研究部門に所属しており、災害・防災に関する資料収集に重点を置いています。

2. 大災害と防災科学技術研究所の歩み

防災科学技術研究所の[研究分野](#)は地震・火山、耐震、水・土砂、雪氷、リスク研究と今でこそ多岐にわたっていますが、設立時は風水害関係の1研究部から始まりました。その発展は社会的に問題となった大災害と密接な関わりがあります([写真でみる災害年表と研究所の沿革](#)176～177p、文末略年表参照)。設立初年には「三八豪雪」が発生し、翌年に雪害実験研究所(現[雪氷防災研究センター](#))が開設しました。1964年の新潟地震では液状化現象の被害から耐震研究が発展しました。最大の転機は1995年の阪神・淡路大震災で、震災以後高密度な地震観測網を敷設、[データ公開](#)し、[緊急地震速報の研究開発](#)も行われました。兵庫県三木市に建設された[E-ディフェンス](#)は実大規模の建物を破壊することができる世界最大の装置です。

3. [利用案内](#)と所蔵資料の紹介 <<[蔵書検索](#)試験公開中>>

防災科学技術研究所は茨城県つくば市、つくばエクスプレスつくば駅から北に約6kmに位置

します。ガラス張りの研究交流棟2階に閲覧室があり、平日9時30分～17時に開室しています¹。どなたもご利用いただけますが、外部利用者への貸出しは他で入手できないものや[当研究所刊行物](#)など、[一部の資料のみ](#)です。



(震災前の閲覧室)

防災科学技術研究所の開設は1963年と比較的新しく、古い資料は多くありません。蔵書数は約15万冊(雑誌13万冊、図書2万冊)で、自然科学系の資料が圧倒的多数を占めます。重点を置いて収集してきたものには、自然災害の報告書や記録、[災害空中写真](#)や災害写真があります。これらは一般書とは区別し、災害の種類によって年代順もしくは地域別に配架されています。

また、特徴ある資料としては子ども向けの災害・防災の本を集めた[防災教育コレクション](#)(団体貸出可)、水害ハザードマップの原型となった[水害地形分類図](#)などがあります。自然災害情報室で用いられる分類は所内研究分野をベースにした独自分類で、大分類は以下のとおりです。

- | | | | |
|----------|----------|-----------------------|-----------------|
| (1)参考図書 | (2)災害全般 | (3)防災研究 | (4)地震災害 |
| (5)耐震研究 | (6)火山災害 | (7)土砂災害 | (8)雪氷災害 |
| (9)洪水災害 | (10)沿岸災害 | (11)津波災害 | (12)気象災害 |
| (13)気候災害 | (14)環境災害 | (15)その他の災害(人災・原子力災害等) | (16)基盤研究(NDC分類) |

4. 情報発信

自然災害情報室では収集した資料を用いてWebコンテンツを製作し、[公開](#)しています。[防災基礎講座](#)や、[災害写真年表](#)、過去の大災害を特集したコンテンツのように災害・防災の知識を学べるサイトは人気があります。[火山ハザードマップデータベース](#)は日本火山学会との協力で作成した、日本の活火山のハザードマップが網羅されているデータベースです。その他、メールマガジン「[自然災害情報の収集・発信の現場から](#)」を月に1回刊行し、隔月で災害資料を所蔵する図書館等を紹介するコーナーも設けています。



(日本の活火山のハザードマップを網羅した「火山ハザードマップデータベース」)

5.東日本大震災の資料収集

自然災害情報室では大きな災害が発生すると、資料が出回るタイミングから大きく3回に分けて資料収集を実施します。まず災害発生直後に、被災県を中心とする地方新聞を購入します。東日本大震災については被害が大きかったことから、9月末までの約半年間、14紙の[地方新聞](#)等を購入し、一部は今も継続中です。次に災害発生後2～6カ月を目安に出版される図書を、解題や目次情報を手掛かりに収集します。その次は半年～1年後に取りまとめられる学会の専門的な調査報告や、自治体や機関の各種報告書を的に絞り収集します。今回の震災では普段は収集対象としない一般雑誌についても、記事の推移をみるために9月末まで継続収集しました。

6.東日本大震災の情報発信

自然災害情報室では、東日本大震災発生直後にリンク集や調査速報、過去に発生した三陸地震津波に関する資料を紹介する[特設サイト](#)を立ち上げました。また、防災科学技術研究所全体の取り組みで興味深いものを以下にご紹介します。

[ALL311](#): 被災者を支援するツールを提供しています。震災を記録する「[311まるごとアーカイブス](#)」活動も始まりました。

[強震モニタ](#): 今現在の日本列島の揺れが一目で分かり、人気を集めています。より専門的には[地震観測網ポータル](#)で震源、マグニチュード等の情報が速報で得られます。高感度地震観測網で観測されたデータは、直接、気象庁や大学等にも伝送され、[緊急地震速報の提供](#)や余震の震源決定等のための基礎データとして利用されています。

7.東日本大震災での被災 -おわりに代えて-

東日本大震災で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

災害に関する資料をこれまで扱ってきたが、自身の職場がこのような被害を受けるとは想定していませんでした。茨城県では地鳴りを伴う震度3～4の地震が度々発生しますが、震度6弱を体験したのは初めてです。3月11日も初めはいつもの地震かと思いましたが、揺れが収まらず大きくなる一方で立っていられなくなり、書棚の資料が床に落ちていくのが見えました

が何もできませんでした([被害状況写真](#))。大半を占めるレール式の書架は電動、手動を問わず破損し、片付けに書庫に入る度、利用者がいなかったのは本当に幸いだったと実感しています。建物に被害があり余震が続いたため、その後2ヵ月ほど別棟に避難しつつ、限定的に業務を継続しました。その間、所内ボランティアの方にも本の片付けに加わっていただき、大変ありがたく心強かったです。雑誌納入業者の中には一時的に納品を止めていただく配慮もあり、助かりました。

現在は年度内の閲覧室復旧を目指し、室員一丸となり努力しています。千年に一度といわれる災害の記録を、今後必要とするであろう方々のために収集・整理・保管し、災害の記憶の一片として継承していく所存です。

¹現在は東日本大震災の被害により一部資料が取り出せないなど、利用に制限があります。閲覧ご希望の方は事前にお問い合わせ下さい。

付録 防災科学技術研究所略年表

- 1959年9月 [伊勢湾台風](#)(死者・行方不明者5000人以上の被害)
- 1959年11月 日本学術会議、防災に関する総合調整機関の設置を勧告
- 1961年11月 災害対策基本法成立、翌年総理府中央防災会議設置
- 1963年4月 防災科学技術センター開設(東京都、現[防災科学技術研究所](#))
- 1963年1月 三八豪雪(死者・行方不明者228名)
- 1964年4月 第2研究部資料調査室(自然災害情報室前身)発足、翌年企画課へ移管
- 1964年6月 新潟地震(地盤液状化の被害顕著、耐震工学研究の推進へ)
- 1964年12月 雪害実験研究所開設(新潟県長岡市、現[雪氷防災研究センター](#))
- 1965年8月 松代群発地震(2年以上継続、最大661回/日の有感地震を観測)
- 1967年2月 [松代地震センター](#)、気象庁精密地震観測室内に開設(長野県松代町;現長野市、職員を1名派遣)
- 1967年6月 [強震観測事業連絡会議](#)、防災科研に設置
- 1967年6月 平塚支所開設(神奈川県平塚市;[波浪等観測](#)、2008年3月移管)
- 1969年10月 新庄支所開設(山形県新庄市)
- 1970年6月 [大型耐震実験施設](#)完成(茨城県つくば市;筑波研究学園都市建設第一号)
- 1974年3月 [大型降雨実験装置](#)完成(茨城県つくば市;降雨強度200mm/時間)
- 1975年10月 研究本館完成(茨城県つくば市)
- 1976年10月 地震予知推進本部設置(内閣府)
- 1978年6月 大規模地震対策特別措置法成立(東海地震の対策へ)



(1981年当時の防災科学技術センター)

1984年3月 関東・東海地殻活動観測網整備完成(70地点のデータをつくばに送信)

1990年6月 防災科学技術研究所に改組、資料調査室、先端解析技術研究部情報解析室へ改組

1995年1月 阪神・淡路大震災(兵庫県南部地震)



(阪神・淡路大震災で倒壊した高速道路(井口隆氏撮影))

1995年7月 [地震調査研究推進本部](#)設置(総理府、現文部科学省)

1997年3月 [雪氷防災実験棟](#)完成(山形県新庄市、天然積雪に近い実験環境を再現)

1997年8月 「地震に関する基盤的調査観測計画」発表(全国的地震観測網の建設)

1999年4月 情報解析室、防災研究データセンターへ移管

2001年1月 省庁再編に伴い文部科学省へ所管変更、同4月独立行政法人へ移行、情報解析室、自然災害研究データ室と統合、防災研究情報センター自然災害情報室へ改組

2001年4月 [地震防災フロンティア研究センター](#)、理化学研究所より移管(兵庫県神戸市、2011年3月廃止)

2003年3月 研究交流棟完成(茨城県つくば市)、自然災害情報室移転



(現在の防災科学技術研究所)

2005年3月 [実大3次元振動破壊実験施設](#) (E-ディフェンス) 完成 (兵庫県三木市)

2011年3月 東日本大震災

2011年4月 社会防災研究領域アウトリーチセンター自然災害情報室へ改組

([防災科学技術研究所](#) 研究資料 第327号「防災科学技術研究所 45年のあゆみ」より一部引用・編集)

(独立行政法人 防災科学技術研究所 自然災害情報室)

[前の記事へ](#)

[次の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)

電子化54号(2011年11月)

発行:国立国会図書館総務部
(National Diet Library)
ISSN:1344-8412

[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)

[専門図書館に関する記事一覧](#)



3.【特集:災害と図書館】厚生労働省図書館の被災状況及び復旧作業

石上 智子

1.震災発生時の状況

平成23年3月11日に発生した東日本大震災は国難とも言うべき未曾有の被害をもたらしたが、厚生労働省図書館(以下「当館」という)でもこれまで経験したことのない甚大な被害が生じた。

当館は中央合同庁舎第5号館の19階にあるため、揺れも大きかった。地震発生時には館内には数名の利用者がいたが、庁舎内の防災センターからの緊急放送により、図書館職員が大声で利用者に避難を呼びかけたので、幸いなことに人的な被害はなかった。



その一方で、物的な被害は想像以上で、奇跡的に被害のなかった執務室を除き、閲覧室と書庫内には大きな被害が出た。被害面積は書庫総面積355平方メートルに対し約90平方メートルに及んだ。

震災から約半年、震災直後から復旧に向けての当館の対応を以下に述べる。

2.復旧に向けて

【震災直後】図書館の被災状況を発信

被害状況から判断して、即座に「休館」を決定し、その旨をただちに発信した。なお、発信は利用者別に次のように行った。

(1)厚生労働省職員



職員メールで図書館が利用不可能な状態であることを連絡し、次いで、国立国会図書館及び他の支部図書館の利用方法を添付したメールを送付した。国立国会図書館や他の支部図書館もかなりの被害が出ていた。震災直後から国立国会図書館が各館の被災状況に関する情報を集約し、中央館・支部図書館総合システム上に随時掲載していたので、この情報を基に他の支部図書館の復旧状況もあわせて連日発信した。

(2) 厚生労働省職員以外

前述の国立国会図書館の情報収集に対しては、当館の被害状況と当分の間は休館する旨を報告した。各支部図書館には貸出依頼のたびに当館の状況を説明し、利用が出来ない旨を連絡した。

一般利用者には、厚生労働省のHP上の図書館案内で休館を掲示した。また電話等で、開館の時期を尋ねる利用者には、当館の現状を丁寧に説明したうえで、開館時期については未定である旨を伝えた。また、直接、調べたい内容を問い合わせてくる利用者に対しては、関係部局の紹介や国立国会図書館をはじめ他の図書館を利用してもらうよう案内をした。



【震災後～1カ月】 散乱した資料の整理と倒壊した書架の撤去作業

当館の書庫内には固定書架20棚と移動式書架35棚(いずれも複柱式)があるが、そのうちの固定式の11棚が倒壊した。これは固定書架のほぼ半分に相当し、図書資料約23,000冊を収蔵していた。また、倒壊を免れた書架でも天つなぎが大きく歪み、棚板や背面側板が変形したり、外れたりして、8割強の書架で何らかの影響がでていた。

そのため、多数の図書資料が飛び出し、散乱して、あちこちに山積みになって、ほぼすべての通路を塞いでいて、書庫内に入るのは難しい状況となっていた。



散乱した資料が通路にはみ出している

まずは、この通路を塞いでしまっている図書資料を撤去し、さらに、その書籍の被害状態を



損傷した書架の側面

チェックする必要があった。余震のたびに書架が音を立てて軋む上、書架から本が落下してくる危険もあったため、様子を見ながらの作業となった。図書館の職員だけでは手が足りず、他の係からの応援も頼み、通路をふさいでいた図書資料を回収し、書庫の奥まで入れることが可能になったが、倒壊した書架の下敷きになった図書資料については危険で取り出すことができなかった。

そのため、業者に依頼することにしたが、年度末のこともあり、事務手続きに時間がかかり、最終的に業者を決定し、倒壊した書架の解体と撤去、合わせて下敷きになっていた図書資料を取り出して梱包するという一連の作業が全て完了したのは年度末ギリギリの3月31日であった。



梱包は1000箱を超えた

[1～3カ月] 書架の点検・書籍の整理と書架購入準備

最も危険な倒壊した書架の撤去作業が終わったので、改めて書架毎に細かく点検を続けた。その結果、一見しただけでは被害がないと見えた移動式書架でも羽目板がずれる、ブックスツッパーが折れ曲がるなど様々な被害が出ていることが判明した。職員で対応できるも

のは、ドライバーやガムテープを手にもち、修繕していった。また、図書資料については、損傷の程度に応じて修繕か廃棄かを判断しながら分別し、結果を書誌データ上に反映させていった。

新規書架の購入については出来るだけ早く行ってもらうよう関係部署にお願いをしていたのだが、実際に動き出したのは年度を越えてからで、具体的な話は5月に入ってからになった。そのうえ、最終的な結論は「倒壊した書架のみを購入対象とし、その他の書架については別途修繕して対応する」という内容であり、我々図書館職員の要望とは大きくかけ離れたものになった。倒壊していない多くの書架でもかなり損傷している箇所があるので、修繕するよりも購入の方が遙かに安価に済むのではないかと思われたからである。

この決定にしたがって、書架の購入と図書資料の再配架作業について、ネットや図書館業界関連の資料を参考にしながら資料作成を始めた。当館は、省庁再編時に旧省からそれぞれの書架を持ち寄って設置したため、図書館関連の備品購入についての資料が皆無であり、経理係があちこちから取り寄せた資料も参考にしながら準備をした。



廃棄対象の図書資料の山

[4カ月～] 図書館の部分的な開館・・・ようやく新書架購入へ

震災以降、当館は休館したままの状態であったが、ゴールデンウィーク頃から、図書館の利用を要望する職員が増えてきた。原発事故や食中毒事件も発生したために、放射線、労災、食品安全関係等の資料照会も多くなった。このため、原則は閉館であったが、特に緊急性を要する場合については個別に対応することとし、利用可能な図書の貸出し等を行うなど実質的に開館と変わらない状況となってきた。

しかし、実際に対応をしてみると、所蔵図書の約4分の1が梱包された状態で利用不可能であることや蔵置場所が不明になってしまった図書資料が多数存在することでレファレンスや所蔵確認に相当な時間がかかるという新たな問題も浮上してきた。

そのため、図書館を開館するかどうかについては賛否が分かれ、結局、当面は受け入れられないと判断し、閉館していたのである。

しかし、一般利用者からの電話による照会や開館時期に関する問い合わせも、震災後3カ月を経過した頃から、激増し始め、なかには「厚生労働省図書館にしか資料が無いのでなんとかならないか」というものが増えてきた。

これらの要望に対応すべく、開館する方向で何度も検討をおこない、不完全な状態ではあるが、7月20日から暫定的な運用で開館することを決定して、HP上に掲示した。

また、ほぼ同時期に新規書架の購入と梱包した図書資料を再配架する一連の作業について、入札の結果、業者が決まり、9月上旬に作業に入ることが決定した。

3.おわりに

この原稿が出るとき(11月予定)には、厚生労働省図書館は通常通りに開館しているはずである。1000年に一度といわれる大震災の時に、図書館に在籍し、被災で半年ちかく休館するという厚生労働省図書館が設立して以来の非常事態に遭遇してしまうことになった。

最初のうちは書架の倒壊という事態に同情的だった声が、休館が長引くにつれ不満、怒りへと変わっていく様子を職員一人一人が味わった。「そちらの図書館にしかない資料なのです。何とかならないのでしょうか。」という悲鳴のような言葉にも、事情を説明し、了解していただくしかなかった切なさ。この間、専門図書館として当館がどれだけ多くの人に利用されているかを強く実感した。本当にいろいろなことを考えさせられた長い時間だったと思う。

その間、国立国会図書館をはじめ、多くの支部図書館の方々にお世話になった。また、多くの方々に温かい励ましのお言葉もいただいた。この場をお借りして深く御礼を申し上げる。

[\(支部厚生労働省図書館\)](#)

[前の記事へ](#)

[次の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)

電子化54号(2011年11月)

発行: 国立国会図書館総務部
(National Diet Library)
ISSN: 1344-8412

[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)

[専門図書館に関する記事一覧](#)



4. 【特集: 災害と図書館】3月の震災における被害状況と対応について

伊藤 もも

1. はじめに

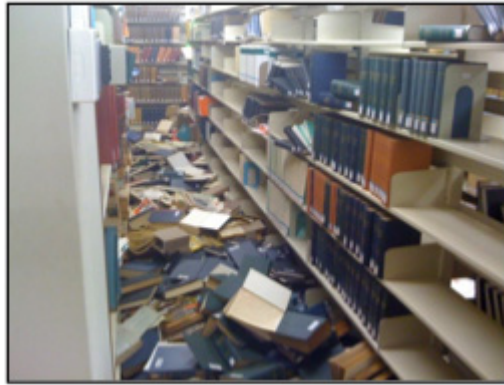
支部農林水産省図書館農林水産技術会議事務局筑波事務所分館(農林水産研究情報総合センター、以下「筑波事務所分館」とします)は、茨城県つくば市にて1978年10月発足、1984年4月より支部図書館となりました所蔵約31万冊の図書館です。3月11日の東日本大震災でつくば市は震度6弱を観測しました。筑波事務所分館も何かに掴まなくては立ってられないほど大きく揺れ、資料落下などの被害を受けました。今回はその状況と震災後の対応について報告いたします。

2. 被害状況

筑波事務所分館には1階と3階に閉架式デポジトリイ書庫、2階に開架式書架があります。震災当日、大きな余震が時折発生するなか職員が手分けして各階の被害状況を確認しました。

1階は、移動書架の資料などが多少落下しましたが、コンテナに収納されていた資料はコンテナ自体が動かなかったため、被害は比較的小規模ですみました。カウンター併設の2階では新着雑誌架の雑誌は無傷でした。それ以外の書架に配架された参考図書や資料類の多くが落下し、地震発生時カウンターにいた職員によると、資料は棚の上のほうから次々に大きな音を立て雪崩のごとく落下していったそうです。また、2台積み重ねていた地図架の落下や防煙ガラスの一部破損、天井一部落下などの被害もありました。

3階は揺れが増幅し、資料も年代の古く重い製本雑誌が多かったため、被害が最も大きく“本の海”と化しました。落下した重い資料がランダムに積み重なった状態となり、資料の破損も多く出ることが予想されました。各階とも書架そのものの倒壊被害はなく、来館者や職員が全員無事で人的被害のなかったことは不幸中の幸いでした。



(写真1)書架被害1(3階)主に製本雑誌が落下した

(各階被害状況)

1階:コンテナ積載以外の約1千冊落下

2階:新着雑誌以外の約5万冊落下、地図架1台破損、防煙ガラス一部破損、天井一部落下

3階:和洋図書、製本雑誌など10万冊が落下



(写真2)書架被害2(3階)参考図書類。下段の資料が地震で前方にずれ、上段の資料の落下時に引っかかって連鎖的に両方とも落ち、背表紙の破損なども生じた。

3. 対応

(1)書架復旧

落下物があるなど危険なため、当面の間は臨時閉館とし職員総出での復旧作業が、震災3日後にスタートしました。来館者が利用する2階と、比較的被害が少ない1階から着手し、3月中にはおおよその資料配架が終了しました。その後、大半の資料が落下した3階の復旧に入りました。午前中9時～10時、午後4時～5時を復旧時間とし、この時間帯を中心に手の空いた職員が復旧作業を行いました。配架順が複雑なことや、大きな余震も続いたことと思うように作業が進みませんでした。また、慣れない力仕事により腰を痛める職員も続出しました。他業務の合間に地道に作業を行いましたが、全面的な資料配架は6月末の外部委託を待つこととなりました。7月上旬には3階も破損資料以外の配架がほぼ終了し、通常通りのサービスが行える体制が整いました。表紙や背表紙が脱落するなど、修繕が必要な資料は約2,000冊、比

較的軽微な破損は非常勤職員により修復、被害の大きいものは外部委託することとしました（10月以降、業者による修復作業予定）。

(2) 各種サービス

筑波事務所分館は、支部図書館業務のほか、全国60の農林水産省所管独立行政法人研究拠点をはじめとする産学官の農林水産関係の研究者に対し、農学情報資源システム（[AGROPEDIA](#)）により農林水産関係試験研究機関総合目録（WebOPAC）や農学文献ライブラリ（AGROLib）などのサービスを提供しています。計画停電対応のためこれらのサービスを一時的に停止しましたが、震災から5日後にはほぼ全てのサービスを縮退運転で再開しました。また、被災地及び救援復旧活動支援のため、無償での文献複写サービスも開始しました。入館及び閲覧サービスは4月15日に再開しました。天井や防煙ガラスは当時まだ破損した状態でしたが、周囲を通行禁止とし利用者の安全性に十分配慮しました。4月時点で3階は復旧の見込みが立っていなかったため、「3階所蔵資料の利用は原則不可」とアナウンスはしましたが、複写や貸出の依頼は待たなでした。可能な限り提供するべく、担当者が本の山から資料を探し出すことも多々ありました。館内の修繕も6月には完了し、通常通りの利用が可能となりました。

3. 終わりに

震災から半年が経過し、筑波事務所分館では節電対策として、来館者不在時はカウンターのみ点灯する、来館者用パソコン3台のうち常時稼働は1台とする、複写機3台のうち常時稼働は1台とする、などを実施しています。多少の不便はありますが、書架も復旧し、ほぼ日常を取り戻しています。

未だ落ち着かない日々を送られている被災地の皆様や図書館関係者におかれましては心よりお見舞い申し上げます。一刻も早い復旧と復興を祈念して本報告を終わります。

（[支部農林水産省図書館農林水産技術会議事務局筑波事務所分館](#)）

[前の記事へ](#)

[次の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)

国立国会図書館 東日本大震災復興支援ページ

国立国会図書館では、被災された方々の生活、今回の大震災からの被災地の復興のために、下記の支援を行っております。

[資料提供・資料相談\(レファレンス\)](#)

[国立国会図書館作成の各種文献、情報](#)

[震災関連リンク集\(外部機関\)](#)

☆資料提供・資料相談(レファレンス)

東日本大震災で被災された地域(青森県・岩手県・宮城県・福島県・茨城県・千葉県)において、復興のために必要な図書館資料の複製物での提供・資料相談(いずれも無料)をメール・FAXで受け付けております。

支援対象は、以下に該当し、当館の通常のサービスによる資料利用・資料相談ができない組織・個人になります。

1. 被災地の震災復興に携わる国・地方公共団体の諸機関、医療・教育機関、企業、ボランティア団体等
2. 上記地域において被災した個人(被災地以外に避難した場合を含む)

[資料提供・資料相談\(レファレンス\)の詳細](#)

☆国立国会図書館作成の各種文献、情報

[地震災害と原子力の安全性に関する、国立国会図書館調査及び立法考査局作成の主要な文献](#)

調査及び立法考査局がこれまでに作成した各種文献から、当該テーマに関する文献をまとめたページ

最新のものは以下の文献です。

[「水産業の復興をめぐる論点」](#)

『調査と情報 ISSUE BRIEF』

751号(2012年5月15日)

[「放射性物質の除染と汚染廃棄物処理の課題－福島第一原発事故とその影響・対策－」](#)

『調査と情報 ISSUE BRIEF』
743号(2012年3月29日)

[『東日本大震災への政策対応と
諸課題』\(2012年3月\)](#)
(調査資料; 2011-4)

[「特集:大規模災害対策法制」
『外国の立法』251号\(2012年3
月\)](#)

[「東日本大震災からの学校の復興—
現状と課題—」](#)
『調査と情報 ISSUE BRIEF』
736号(2012年2月7日)

[東日本大震災関連情報\(図書館・文
書館資料の復旧\)](#)

図書館・文書館資料等の復旧に関
する参考情報のページ

[地震・災害 関連情報](#)

レファレンス協同データベース事業
ホームページ

[東日本大震災と図書館に関する記事](#)
カレントアウェアネス・ポータル

[東日本大震災復興支援関連情報](#)
リサーチ・ナビ「調べ方案内」:復興
支援に役立つ資料・情報等の調べ方
等を掲載

[東日本大震災・福島原発事故関連の
情報を提供中の主な国際機関のリン
ク集](#)

リサーチ・ナビ

[東日本大震災と子どもの読書につい
ての情報](#)

子どもと本の情報・調査(国際子ど
も図書館)

☆震災関連リンク集(外部機関)

[インターネット資料収集保存事業\(ウェブサイト別\)](#)

震災復興等に役立つ各種情報・サイト等を掲載しています。被災地域の自治体のウェブサイトを保存

◎健康相談に関する情報◎

[文部科学省健康相談ホットライン](#)
[放射線医学総合研究所放射線被ばく電話相談窓口情報](#)

[法務省「放射線被爆についての風評被害等に関する緊急メッセージ」](#)

◎図書館関係◎

[日本図書館協会](#)
[国立大学協会](#)
[国立大学図書館協会](#)
[私立大学図書館協会](#)
[青森県立図書館](#)
[宮城県立図書館](#)
[岩手県立図書館](#)
[福島県立図書館](#)
[茨城県立図書館](#)
[千葉県立図書館](#)
[栃木県立図書館](#)
[新潟県立図書館](#)
[長野県立図書館](#)
[図書館振興財団](#)

◎民間機関等◎

[博物館・美術館、図書館、文書館、公民館の被災・救援情報サイト\(saveMLAK\)](#)

[このページの先頭へ](#)

◎国・地方公共団体等◎

[首相官邸災害対策ページ](#)
[内閣府「東日本大震災関連情報」](#)
[宮内庁「東日本大震災関連」](#)
[総務省「東日本大震災関連情報」](#)

[法務省「東日本大震災への対応について」](#)

[外務省「東日本大震災」](#)

[財務省「東日本大震災関連情報」](#)

[文部科学省「東日本大震災関連情報」](#)

[文部科学省「子どもの学び支援ポータルサイト」](#)

[厚生労働省「東日本大震災関連情報」](#)

[農林水産省「東日本大震災に関する情報」](#)

[経済産業省「東日本大震災関連情報」](#)

[原子力安全・保安院](#)

[国土交通省「東日本大震災関連情報」](#)

[気象庁](#)

[環境省「東日本大震災への対応について」](#)

[防衛省・自衛隊「東日本大震災への対応」](#)

[日本原子力研究開発機構](#)

[青森県「ホームページ」](#)

[岩手県「ホームページ」](#)

[宮城県「東日本大震災・災害情報」](#)

[福島県「ホームページ\(暫定版\)」](#)

[茨城県「東日本大震災情報」](#)

[千葉県「東日本大震災関連情報」](#)

電子化54号(2011年11月)

発行:国立国会図書館総務部
(National Diet Library)
ISSN:1344-8412



[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)

[専門図書館に関する記事一覧](#)

5. 平成23年度専門図書館協議会全国研究集会からの報告

野沢 義隆

1.はじめに

平成23年6月30日、7月1日の2日間、東京都千代田区の東京商工会議所において[平成23年度専門図書館協議会総会および全国研究集会](#)が開催され、全国から176名が参加しました。今年度の総合テーマは「変わる図書館／変わらない図書館～変化の時代の専門図書館を問う」です。

まず、開会式に引き続き東京大学大学院経済学研究科教授、東京大学経済学図書館長・経済学部資料室長である伊藤正直氏より「東京大学経済学部資料室の軌跡と山一証券資料の受入・整理」と題して基調講演が行われました。概要について以下のとおり紹介いたします。

伊藤教授が山一証券より委嘱されていた「山一証券百年史」の編纂が完成間近の頃、山一証券が破綻・廃業しました。教授は、その膨大かつ貴重な資料の廃棄を回避するため直ちに関係先に交渉し、資料を資産として保全し、次いで、東京大学において資金・倉庫・人材の各問題の解決に奔走し、寄贈を受け入れることが可能となりました。



百年史関係の資料270箱以外に、約5000箱もの本社資料がありましたが、その中から証券取引等の個人情報を含む資料が除外された457箱分の資料の寄贈を受けました。また、寄贈された資料について一から目録作成作業に執りかかり、約6年掛かりでマイクロフィルム・DVD化まで漕ぎ着け、刊行が始まっているところとのことです。資料の中には、大蔵省による検査の実態や、破綻3日前の取締役会議では破綻問題が議題にさえ上っていなかったことなど、一般に知られていない貴重な資料を確認することができたとのことでした。

この山一証券資料は当時の証券界の内幕を知りえる非常に画期的な一次資料として世界中の研究者から注目を集めており、今後、多くの研究者に活用されていくものと思われると結ばれました。

2日目は6つの分科会が企画され、私は、第1分科会「企業図書館のファシリティと利用者サービス」と第5分科会「専門図書館経営の新機軸」に参加しました。

2. 第1分科会「企業図書館のファシリティと利用者サービス」報告

第1分科会では「企業図書館のファシリティと利用者サービス」のテーマで、IT技術の進歩や電子化の進展、多様化など図書館を取り巻く状況が大きく変化する中、企業内の図書館では利用者にどのような機能やサービスを提供していくか「リニューアル」をキーワードに行われました。

最初に、富士通(株)知的財産本部の大森圭子氏より「図書館システムのリニューアルと利用拡大活動」と題し以下の旨の講演がありました。

富士通の社内図書館の一つである川崎技術情報センターが図書館のシステムのリニューアルを機に同じ社内図書館である富士通研究所厚木図書館とのシステム統合を行い、検索時の効率アップと利便性を強化しました。また、社内アンケートを実施し「図書館を利用したことがない」、「HPを知らない」が共に約6割との結果であったため、環境改善及びメールを使用した社員へのピンポイント案内などを実施し、利用率の向上を実現したと結ばれました。

講演を聴き、財務省図書館における前年度の職員アンケート調査で同様の結果に対する対応策として平成22年2月より開始した職員向け案内メールによる認知度向上に思いを馳せ、大いに共感するところがありました。

次に、NTT横須賀研究開発センタ図書館の小沢香穂里氏より「図書館リニューアル・人が集まる空間づくり」と題し以下の旨の講演がありました。

横須賀研究開発センタにおいては、利用者の大半は若い研究者であることに焦点を当て、僅かな予算の範囲内で明るい空間やお洒落な雰囲気に変えるなど、人が集まりやすいスペース作り等を行いました。その結果、館内へ職員が自然と集まるようになり、利用者数が30%アップしたと結ばれました。この講演では参加者から大きな関心が集まり、予定時間を越えて多くの質疑応答が交わされました。

財務省図書館においてもこの講演を参考に、まだ僅かではありますが、館内案内版にかわいいキャラクターを用いた雰囲気作りなどリニューアルを早速実践しているところです。

3. 第5分科会「専門図書館経営の新機軸」報告

第5分科会では「専門図書館経営の新機軸」のテーマで、近年、図書館運営の効率化や経費節減の達成と同時にサービスの維持向上を図ることが求められ、また、インターネット上からの情報入手の増加傾向により来館者の減少が進んでおり、このような状況下において、新しい発想で図書館経営と利用者サービスの新機軸を切り開いている3つの専門図書館より先駆的事例の報告がありました。

最初に、(独)物質・材料研究機構科学情報室の高久雅生氏より「ウェブと情報技術をつかって資料と読者・著者を結びつける」と題し、以下の旨の講演がありました。

科学情報室は物質・材料研究機構における専門図書館として、オンラインジャーナル等の

サービスに注力するとともに、ウェブ、ポータルサイト運営による情報提供、発信の傍ら、近年、研究論文の情報発信、研究者総覧サービスの開発、改造可能なオープンソースソフトウェア図書館システムの導入を行ってきました。なお、図書担当者は僅か2人ですが、貸出返却等は利用者によるセルフで運営されていますと結ばれました。



次に、千代田区立千代田図書館の新谷迪子館長より「ヒト・モノ・カネの不足を補う逆転の発想」と題し、千代田図書館の新しい取組みについて講演がありました。

図書館案内のほか、千代田区の昼間人口85万人という特性を生かし、ビジネス客も対象としたサービスとして、神田の出版社、古書店街、新刊書店の案内や、区内施設・飲食店の案内も行っている等の紹介がありました。図書館界では大変有名な千代田図書館ならではの発想の多様性には大いに学ぶべきものがありました。

最後に、BACH社の幅允孝氏およびスルガ銀行の山本貴啓氏より、「あらゆる場所に本棚を」と題し、以下の旨の講演がありました。

ある病院から脳卒中患者のリハビリのための1500冊の図書を揃えて欲しい旨の発注を受けました。病院管理者、看護師等からのヒアリング、また、脳卒中リハビリ患者とコミュニケーションをとっていく中で、患者にとって好奇心と言うのは閉塞した既視感を突破する唯一の方法と思われ、発注を受けた1500冊の選定・納品にあたって細部の積み重ねが重要であったと改めて認識しましたと結ばれました。

4.おわりに

財務省図書館は財政、経済、金融等の分野の蔵書の充実に重点を置き、主に財務省職員の執務に寄与することを目的とした専門図書館であり、担当となって間もない僅かな職員が限られた予算の中で運営しています。今回の講演で紹介された厳しい条件下における事例や得られた数々のアイデアを参考に、また、この機会に出会うことの出来た多くの参加者の方々からのご助言等に感謝しつつ、更なる改善を行ってまいりたいと思います。

(支部財務省図書館)

[前の記事へ](#)

[次の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)

電子化54号(2011年11月)

発行: 国立国会図書館総務部
(National Diet Library)
ISSN: 1344-8412



[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)

[専門図書館に関する記事一覧](#)

6. 図書館の存在意義をアピールすることの大切さを痛感 ～支部図書館職員特別研修「図書館広報をもっと魅力的に！」を受講して～

野林 正毅

1. はじめに

平成23年6月10日(金)に、帝京大学総合教育センター仁上幸治准教授による広報研修を受講した。本研修は、昨年度「“図書館広報をもっと魅力的に！”～少人数ならではの即効変身術～」として総論が実施された研修の実習編となる。このため、まず、昨年度の総論の簡単なおさらいから始まり、その後実習を行った。

最初に、数班に分かれて各人が持ち寄った各支部図書館の資料や注目するちらし等について討議を行った。後半は、討議の中でのメンバーのコメントなども交えて、各支部図書館毎に自館資料等の説明を実施し、資料・説明に対して仁上先生の講評をいただいた。図書館広報で図書館の存在をどう利用者に訴えていくのかを研修を通して実感させられた。



はれるん
“気象庁マスコット
キャラクター”

2. 研修を受講して感じた事

仁上先生が講義で言われたように、過去の形式にとらわれない新しい発想を持つ事、利用者が図書館に何を求めているのか、図書館として何をしなくてはいけないのかを知り、さらには図書館の存在意義をアピールすることの大切さを感じた。研修生も危機感を感じてか、研修に真剣に取り組んでいた。各支部図書館において作成している案内は図書館広報についていろいろ工夫されており、参考にしたいと感じた点が数多くあり有意義であった。特に葉の作成や図書案内における書影の貼りつけは視覚に訴えるという点で参考になった。

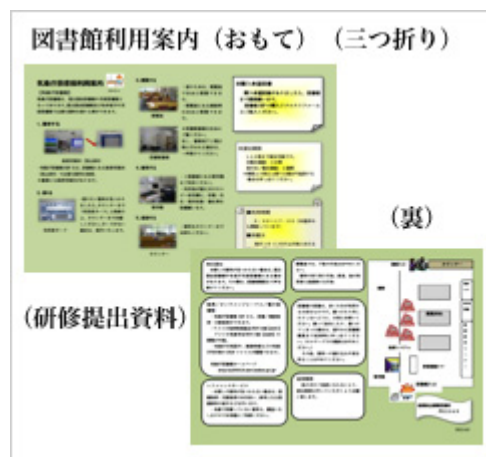


講
評で
は各
支部
図書館の
持つ

ているよさを引き出して広報を行っていくこと、少ない予算と労力で効果を生みだし広報活動を行っていくことがいかに大事である

かとの視点から有益なご指導をいただいた。研修参加に際し、図書館の専門家であらせられる仁上先生の生の声が聞けたことは、研修の中で最も意義のあることであった。

また、研修終了後には、中央館において各支部図書館で作成した資料を執務参考資料としてまとめいただいた。これは広報における有益な資料として活用できる。



3. 研修後実施した事及び実施予定行事

当館では、付箋紙等で本を傷めないよう葉を作成した(図1)。又、職員からの要望でもあったが、職員が良く利用する食堂と生協に広報用の案内を出し、職員に図書館のアピールを行った(図2)。さらに夏休み期間限定ではあるが、図書館入口に子供向けの本(科学・実験)を提示し、庁舎玄関に案内を出した。今後の予定として、図書館のアピールや利用促進を目的として著名な方をお招きし、談話会を実施する予定である。

図書館利用案内(図2)



研修後作成

4. 参考図書を紹介

研修への参加に際し、研修講師をしていただいた仁上先生編著の『図書館広報実践ハンドブック』を参考にさせていただいた。この本は、図書館勤務職員の基本となる本であり、図書館広報に必要、かつ参考となる記事が満載している。当館でも是非とも活用していきたい、そして、皆さまにも活用していただきたい1冊といえる。特に省エネ文字については、画数を減らす事で、文字の省エネ化を図るという独創的な発想であり、是非とも当館でも活用していきたいと感じた。

㊦ (図書館の略字) = 図書館 - { (図 - 口) + 書館 } + ト
 ㊦ (情報の略字) = (情 - 青) + (報 - 幸)



私立大学図書館協会
東地区部会研究部企画広報研究部会編集.
図書館広報実践ハンドブック
: 広報戦略の全面展開を目指して
日本図書館協会発売 2002.9

5. おわりに

図書館の仕事は地味ではあるが、仁上准教授の「広報は派手に！」を受け止め、この研修で学んだ事を生かし利用者を引き付けるような図書館広報を行い、魅力的な図書館・利用しやすい図書館として利用者を増やしていきたい。今回受講した研修は、今後の広報活動の参考になりとても有意義であった。

最後に、貴重な講義及び講評をくださった仁上先生、研修を実施してくださった国立国会図書館スタッフの皆様、更には、一緒に受講し貴重な意見をくださった各支部図書館の皆さまありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

(支部気象庁図書館)

文中にある談話会については、次号55号で当課職員からの報告を掲載いたします(編集部)。

[前の記事へ](#)

[次の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)

電子化54号(2011年11月)

発行:国立国会図書館総務部
(National Diet Library)
ISSN:1344-8412



[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)

[専門図書館に関する記事一覧](#)

7.法務図書館所蔵「未整理図書」の整理と目録の刊行について

高山 京子

私は、昭和33年春、法務省に採用され、職業人としての第一歩を踏み出した。そのとき職種の希望を訊かれ、もともと図書が好きだった私は、ためらわず「図書の係です」と答えた。これが、その後の私の人生を決定することになったのである。ちなみに、法務図書館は、国立国会図書館の支部図書館(昭和23年2月9日法律第5号国立国会図書館法)である。

図書係への配属の希望は即座には叶えられず、法務省の統計の業務など様々な仕事に割り振られた。法務図書館に配属されたのは、入省後、しばらく経ってからのことである。そしてそのときでさえ、私には図書館の業務について深い認識があったわけではない。私にとって幸いだったのは、法務図書館は職員を育てることに熱心な職場だったことである。当時の松山貞夫図書館長(法律学者で、岩波書店『法律学大辞典』・『法律学小辞典』編集に参加された)のリーダーシップで、各種の研修に参加して実力を付けることが奨励されていた。また、図書館員も福島小夜子さんを筆頭に極めて優秀な先輩が揃っていた。「仕事ができないのなら家に帰りなさい」と厳しく言われたこともある。しかし、そのような先輩の指導のおかげで、図書館員として私は少しずつ育てられ、成長したと思う。結婚・出産などのできごともあったが、その都度、周りに励まされて、受入係、閲覧係などの業務を楽しく続けた。

現在とは違いコンピュータによる検索ではなく、図書は窓口の職員を通しての貸出しであったから、閲覧者との間には自ずから親密な関係が生まれた。熱心に図書館を利用していた若い検事さんや判事補の方が、次々に頭角を現して昇進されるのを見るのは嬉しいことだった。また、特に昭和30年代は、大学の施設が不十分であったのか、牧野英一先生、我妻栄先生、宮澤俊義先生など、高名な学者の方も来館された。当時の法務図書館には法学者を中心としたサロンのような雰囲気も漂っていたと思う。

昭和40年代に入ると、法務省の別館が増築されたため、法務図書館には「貴重書室」が新設され、未整理の図書がこの部屋に移された。そして、その一部について、慶應義塾大学の手塚豊教授によって選定・整理が行われ、最初の「貴重書目録」が作成された。これは、資料を精査して立法過程を復元し、法域別、時代順に整理した模範的な目録であった。私は、そ

の作業に直接には関わらず、多少のお手伝いをしたにとどまったが、手塚先生にはたいへん親しくして頂き、お手紙なども頂戴した。後日、慶應の院生グループと深い関係を持つようになったが、その発端は手塚先生が与えてくださったのである。

昭和の末まで「旧司法研究室」の建物が法務図書館の事務室・書庫として使用されていたが、平成を迎えて赤れんが棟の復原が開始された。そして、法務図書館は、工事完成後は赤れんが棟に移ることになり、終の住み処を得たのである。しかし、復原作業が完了したのは平成6年のことで、その間、祝田橋庁舎への仮移転を含めて、法務図書館は2回にわたる大規模な移転を経験ししなければならなかった。コンテナ4万5千個という数字が記憶に残っている。これは、他の図書館の移転の場合にも参考になると思われ、私は、『専門図書館』誌に経緯を寄稿させて頂いた⁽¹⁾。

さて、法務図書館ではこの移転の過程で、いわゆる貴重書のほかにも重要な文書・資料が未整理の状態で存在することに気付き、先輩職員の方が「未整理図書」と命名して、段ボールの箱に収納するとともに、「後日必ず整理するように」と言い残された。しかし、その後私はまもなく定年を迎えて法務省を退職し、先輩の言葉も半ば忘れかけていた。定年後の私を迎えてくれたのは、本郷にある法律書の出版社、信山社で、立法資料全集の刊行に努力しており、私もその編集スタッフに加えられた。この分野のベテランの指導を受けながら、私は毎日のように国立国会図書館の憲政資料室に通い、関連資料を閲覧・謄写した。それは、明治・大正の立法資料の価値を深く認識する過程でもあった。

そのような日が約1年続いた平成11年春、法務省の太田茂司法法制課長(当時)から、呼び出しの電話があった。参上してみると、「段ボール42箱の未整理図書があるので、内容を点検して欲しい。保存の必要はないという判断になれば、廃棄する」と言われた。私は、直ちに状況を把握できないほど心が乱れたが、「廃棄」になれば二度と取り戻せないという気持ちにかられた。以前に聞いた先輩の願いも胸に蘇った。私は、「はい。やってみます」と答えたが、それが10年に及ぶ苦闘の始まりだった。

「段ボール42箱」。量も膨大だし、内容は複雑怪奇である。とても一人でこなせる仕事ではない。宮内庁書陵部図書課の元専門官、藤井祥子さんは、古文書の専門家で、助けになる友人だった。そしてもう一人、当時、宇都宮大学で教えておられた小沢隆司さんは、日本法制史の新進気鋭の研究者であったことから、「協力して下さい」とご無理をお願いし、平成11年7月、この3人のチームが動き出した。段ボールの箱を開いて見ると、簿冊は埃にまみれて固まっており、一枚づつはがして清掃しなければならなかった。保存のためアイロンもかけ、書誌事項を一つ一つ確認した。気が遠くなるほど手間のかかる作業であったが、幸い、日本法制史を専攻する慶應義塾大学その他の大学院生の人たちが、作業の難航を知って助力してくださるようになり、マン・パワーも次第に整って、仕事が捗るようになった。

もっとも、作業自体がもともと法務省の正規の業務としてスタートしたわけではなく、元法務専門官高山のボランティア活動的な性格を帯びていたため、当初は法務省内部での協力も必ずしも充分でなかった。作業を始めてしばらく経った後、高山宛に若干の手当が出るようになったが、それも作業に参加した大学院生の人達に分けると、お昼の弁当代で消える程度の額だった。また、作業の場となった法務図書館の立場からすれば、本来の業務とはかかわりのない仕事が侵入しているという感じもあったかもしれない。逆風に遭遇し、「涙にかられた」時期も皆無ではなかったと思う。

しかし、平成13年6月、法務省に「特別顧問室」が設置され、私は思いがけず特別顧問室付き秘書に採用された。その当時は民事訴訟法の三ヶ月章先生が特別顧問であったが、新た

さらに、協力者の体制も強化された。資料の内容が徳川時代のものに始まり、明治・大正・昭和の三代にわたることが分かったので、幕府法については、その分野について造詣の深い國學院大學の高塩博教授のご教示を得た。高塩教授は、資料の整理を指導されるとともに、その意義を解明する講演をして下さった(2)。大正時代の法制資料の白眉ともいえるべき「山岡萬之助関係文書」については、小沢隆司教授が中心となって講演して下さった(3)。また、法務図書館が「山岡萬之助とその時代」と題する企画展を開催したことなどから、若手研究者の参加も多くなったが、いずれも現在は大学の教授、准教授や専任講師として教壇に立っておられる。

あとがき

段ボールの箱に眠っていた文書を世に出し、活用の道筋を付けたことに安堵するとともに、これが研究・調査の手がかりとしてお役に立つことを願っております。何の学識もない私ですが、図書館の仕事に愛着を持ち、夢を追って今日まで過ごしました。皆様も、図書館に埋められている資料があるとお気付きの際は、どうぞ手を差し伸べてください。

(1) 高山京子「新装オープンした赤レンガの法務図書館 赤レンガ庁舎への図書 資料の移転作業について」『専門図書館』15号(1995)。

(2) 高塩博「法務図書館所蔵の幕府方関係資料」。講演の内容は、『司法法制部季報』112号(2006)に紹介されている。

(3) 高山京子「『山岡萬之助関係文書目録』刊行記念講演会について」『刑政』120巻1号(2009)

(別表1)

- ・未整理図書目録「刊行に寄せて」
- ・解題等執筆者一覧

[illegible]

発行 順位	目録名	発行 日	刊行に 寄せて	整理 作業を 終えて	解題	編集	件名 数	参考 文献 数	計	頁数	収録 期間
1	故牧野英一博士 寄贈図書 目録新版	H14.4		高山 京子		小沢 隆司 藤井 祥子 高山 京子	1364	0	1364	248	T10 ～ S12
2	山岡萬之助関係 文書目録	H19.3		高山 京子	小沢 隆司	小沢 隆司 児玉 圭司 藤井 祥子 高山 京子	1982	64	2046	274	M45 ～ S14
3	司法大臣 岩村通世 関係文書 目録	H20.3		高山 京子	小沢 隆司	小沢 隆司 宮平 真弥 藤井 祥子 高山 京子	1518	60	1578	215	S4 ～ S22
4	「徳川裁 判事例」 「徳川禁 令考」 編纂資料 目録	H20.3	東京大学 名誉教授 石井 紫 郎(※)	中網 栄美 子 高山 京子	高塩 博	高塩 博 中網 栄美 子 高山 京子	95	95	190	56	
5	陸地測量 部発行 地図目録	H20.3		高山 京子	馬場 義信	馬場 義信 高山 京子	1917	6	1923	124	M20 ～ S16
						小沢 隆司					

6	司法制度 調査会 関係文書 目録	H21.3	法務省 特別顧問 松尾 浩 也	高山 京子	出口 雄一	宮平 真弥 出口 雄一 児玉 圭司 高山 京子	288	40	328	71	S9 ～ S13
7	司法大臣 官房 調査課関 係文書 目録	H21.3	公正取引 委員会 委員 濱崎 恭 生	高山 京子	出口 雄一	小沢 隆司 宮平 真弥 出口 雄一 高山 京子	548	96	644	155	S21 ～ S24
8	昭和25年 商法改正 関係 文書目録	H21.3	学習院大 学 法科大学 院 教授 前田 重 行	高山 京子	出口 雄一	小沢 隆司 出口 雄一 児玉 圭司 高山 京子	159	66	225	55	S24 ～ S26
9	連合国総 司令部と の 会談報告 関係 文書目録	H21.3	法務省 特別顧問 松尾 浩 也	高山 京子	出口 雄一	小沢 隆司 出口 雄一 高山 京子	751	221	972	192	S21 ～ S26
10	連合国総 司令部と の 会談目録 関係文書 目録	H21.3	上智大学 法科大学 院 教授 高見 勝 利	高山 京子	出口 雄一	小沢 隆司 出口 雄一 高山 京子	1789	167	1956	492	S23 ～ S27
11	小澤文雄 関係 文書目録	H21.3	元仙台高 等裁判所 長官 現弁護士 藤田 耕	高山 京子	出口 雄一	小沢 隆司 出口 雄一 高山	1241	95	1336	240	S20 ～ S22

			三			京子					
12	昭和27年 会社更生 法等 関係文書 目録	H21.3	法務省 特別顧問 竹下 守 夫	高山 京子	小沢 隆司	小沢 隆司 高山 京子	654	33	687	94	S24 ～ S26
13	甲府地方 検察庁 都留支部 旧蔵 文書目録	未発 行	國學院大 學 法学部教 授 高塩 博	高山 京子	岩谷 十郎	藤井 祥子 正田 周大 橋本 宗馬 高山 京子	1837	532	2369	537	M19 ～ S31
14	新潟地方 検察庁 旧蔵 文書目録	未発 行	慶應義塾 大学 法学部教 授 岩谷 十 郎	高山 京子	高塩 博	馬場 義信 菊地 幸晴 藤井 祥子 高山 京子	3443	532	3975	651	M15 ～ M32
15	京都区裁 判所検事 局 旧蔵 文書目録	未発 行	慶應義塾 大学 法学部教 授 岩谷 十 郎	高山 京子	高塩 博	高塩 博 橋本 宗馬 高山 京子	482	406	888	139	M29 ～ M38
16	法務図書 館 関係資料	未発 行		高山 京子			111	0	111	-	
	合計						18179	2413	20592	3543	

※「徳川裁判事例」「徳川禁令考」編纂資料目録については、「序」として執筆いただいた。
「刊行に寄せて」は法務図書館が執筆。

(元法務図書館法務専門官)

[前の記事へ](#)

[次の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)

電子化54号(2011年11月)

発行: 国立国会図書館総務部
(National Diet Library)
ISSN: 1344-8412



[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)

[専門図書館に関する記事一覧](#)

8. 平成23年度行政・司法各部門支部図書館職員への感謝状贈呈

平成23年10月12日(水)支部図書館職員1名に対して、長尾真国立国会図書館長より感謝状が贈られました。感謝状は昭和57年国立国会図書館内規第5号により、支部図書館職員のうち10年以上支部図書館に勤務し、支部図書館の向上発展に寄与した人に贈られています。

贈呈式後、総務部長、総務部支部図書館・協力課長ほか中央館職員と懇談しました。

感謝状を贈られた人

支部気象庁図書館 駒崎 由紀夫



長尾館長(前列左)、駒崎氏(前列中央)

今回、感謝状を贈呈された支部気象庁図書館の駒崎由紀夫氏から、『びぶろす』に以下の原稿をお寄せいただきました。

支部図書館に勤務して

大学で物理を学んだこともあり、気象庁に就職した。当初は図書館に勤務することなど予想もしていなかったが、このたび、国立国会図書館長より支部図書館職員としての永年(10年以上)の勤務に対し感謝状をいただいた。

図書館の業務など全く知らなかった私が、10年にもわたり図書館業務を続けてこられたのは、職場の人たちの温かい支援のおかげと感謝しているが、支部図書館制度の下、中央館、各支部図書館の支援が受けられたのも大きかったと感じている。

中央館の支援で役立ったものとしては、研修がある。基本的な知識が習得できるのは、もちろんだが、見学もあり、普段見ることのできない書庫や国会分館、幾つかの支部図書館などを見ることができ、とても興味深かった。特に印象に残ったのは、中央館の新館地下書庫の「光庭」である。光庭は自然の光を地下までとり入れるだけではなく、書庫の中の温度、湿度の変化を小さくする効果があり、更に書庫内で働く人々の心理的負担を軽減するとともに、停電時の備えにもなっているそうだ。気象庁図書館の薄暗いだけの地下書庫からすれば羨ましい限りである。

各支部図書館間では、メーリングリストを利用した情報・意見交換などが行える。これを使えば、困ったことや疑問に思ったことなどがあった場合に、他の支部図書館に相談ができる。

また、国立国会図書館中央館・支部図書館分散型総合目録データベースシステムを用いれば、各支部図書館の蔵書を一度にまとめて検索できる。このような便利なシステムも支部図書館制度あってのことである。

支部図書館制度という世界にも例を見ない制度の下で、図書館に勤務できたことは、貴重な体験だと感じている。

この10年の間に、中央館、各支部図書館の皆様には、ご指導、ご助言を賜りましたことを、この紙面をお借りしてお礼を申し上げます。

(支部気象庁図書館)



(長尾真館長から感謝状を贈呈される駒崎氏)

[前の記事へ](#)

[次の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)

発行: 国立国会図書館総務部
(National Diet Library)
ISSN: 1344-8412



[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)

[専門図書館に関する記事一覧](#)

9.日 誌(平成23年8月～平成23年10月)

平成23年	8月1日	支部図書館長異動 国土交通省図書館長 鵜沢 哲也(前 内田 傑)
	8月24日	特別研修 見学「国会レファレンス課資料室について」、「国会分館(議事堂内図書館)について」 15館 32名
	9月1日	国立国会図書館人事異動 総務部長 網野 光明 (前 田屋 裕之)
	9月1日	支部図書館長異動 消費者庁図書館長 服部 高明 (前 山崎 俊巳) 農林水産省図書館長 高野 浩文 (前 金丸 康夫) 海上保安庁図書館長 村上 玉樹 (前 小川 晴基)
	9月2日	支部図書館長異動 警察庁図書館長 梶田 好一 (前 山下 史雄)
	9月16日	特別研修「図書館資料の保存」 11館 14名
	10月1日	支部図書館長異動 海上保安庁図書館長 東井 芳隆 (前 村上 玉樹)
	10月7日	特別研修 見学「支部経済産業省図書館について」 16館 27名
	10月13日 と14日	平成23年度(第97回)全国図書館大会(東京・多摩)

[前の記事へ](#)

[次の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)

びぶろす-Biblos

電子化54号(平成23年11月)

発行:国立国会図書館総務部
(National Diet Library)
ISSN:1344-8412



[最新号の目次](#)

[バックナンバー](#)

[支部図書館に関する記事一覧](#)

[専門図書館に関する記事一覧](#)

10.【国立国会図書館 刊行物紹介】

当館HPに公開されている刊行物の中から、平成23年8月～平成23年10月の間に公開された記事の一部を紹介します。

『国立国会図書館月報』

国立国会図書館の蔵書や各種サービスについて総合的に紹介する広報誌です。2004年4月以降はPDF形式でご覧いただけます。

- 図書館の復興とその支援 大震災を越えて p.4-11 ([607号\(2011年10月\)](#))
- 館内サービスが変わります p.24-27 ([606号\(2011年9月\)](#))
- 新しい統合検索サービス 国立国会図書館サーチ p.18-21 ([604/605号\(2011年7/8月\)](#))
- <館内スコープ> 『びぶろす』 支部図書館制度とともに p.27 ([604/605号\(2011年7/8月\)](#))
- …他

([平成23年刊行分一覧](#))

『調査と情報』—ISSUE BRIEF—

国政上の重要課題について、その背景・経緯・問題点等を簡潔にとりまとめた雑誌です。

- No.725「[首都直下地震と首都機能をめぐる課題](#)」(2011.10.4)
- No.724「[東日本大震災と復興まちづくり—津波防災の観点から—](#)」(2011.9.22)
- …他

([平成23年刊行分一覧](#))

『外国の立法』

諸外国の立法動向を簡潔にまとめており、季刊版と月刊版があります。

- 「[【アメリカ】債務上限引上げと財政赤字削減の予算コントロール法成立](#)」(No.249-1 (2011年10月:月刊版 立法情報))
- 「[【EU】リスボン条約後のコミロジエ手続—欧州委員会の実施権限の行使を統制する仕組み—](#)」(No.249(2011年9月:季刊版)主要立法(翻訳・解説))
- 「[【アメリカ】政府の効率性等向上に関する大統領令](#)」(No.248-2 (2011年8月:月刊版 立法情報))
- …他

また、月刊版では、各国の立法情報をコンパクトにまとめた短信も掲載しています。

- 2011年10月:月刊版 [短信](#)
- 2011年8月:月刊版 [短信](#)

([平成23年刊行分一覧](#))

『カレントアウェアネス』

図書館及び図書館情報学における、国内外の近年の動向及びトピックスを解説・レビューする情報誌です。

- 「[CA1750 – 英国とオランダの国立図書館にみる新聞資料デジタル化プロジェクト](#)」
(No.309 (CA1750-CA1755) 2011.09.20)
- 「[動向レビュー:英国における公貸権制度の最新動向—「デジタル経済法2010」との関連で](#)」(No.309 (CA1750-CA1755) 2011.09.20)
- …他

([2011年刊行分一覧](#))

([2010年刊行分一覧](#))

[前の記事へ](#)

[このページの先頭へ](#)